

継続看護実習における看護学生の学習内容の検討

大見サキエ¹⁾、大久保仁司¹⁾、林 和 枝¹⁾、小林政雄¹⁾、鈴木雪乃¹⁾
森 京子¹⁾、深谷由美¹⁾、尾関唯未¹⁾、白木京子¹⁾、岡本名珠子¹⁾
古澤洋子¹⁾、岡本華枝²⁾、小西真人²⁾、中川名帆子²⁾

A Consideration of the Learning Content for Nursing Students in Continuing Nursing Care Practicum

Sakie OMI¹⁾, Hitoshi OKUBO¹⁾, Kazue HAYASHI¹⁾, Masao KOBAYASHI¹⁾
Yukino SUZUKI¹⁾, Kyoko MORI¹⁾, Yumi FUKAYA¹⁾, Yumi OZEKI¹⁾
Kyoko SIRAKI¹⁾, Namiko OKAMOTO¹⁾, Hiroko FURUZAWA¹⁾
Hanae OKAMOTO²⁾, Masato KONISHI²⁾, Nahoko NAKAGAWA²⁾

要 旨

「目的」「継続看護実習」の学生のレポートを分析し、学習内容を明らかにする。「方法」倫理的配慮をして研究の趣旨に同意の得られた学生54名の記録を分析対象として、記述データを質的帰納的に分析し、学習場面および学習内容を整理した。「結果」学生は診療や継続治療、カンファレンス、記録閲覧等の場面で学習していた。患者の特徴として、専門的医療を望んでいる事、環境を調整している事、受診の負担や不安を抱えている事等を学習していた。また、具体的な看護実践内容を通して、継続看護に必要な連携の意義や方法、多職種連携における外来看護師の役割、独自性、求められる能力、具体的な倫理的行動を学習していた。「考察」学生は多様な場面で患者の特徴を理解し、多職種連携の視点をもって外来看護師の役割や独自性を学習しており、実習目標は概ね達成され、統合分野における継続看護実習の有効性が確認できた。今後実習方法の検討が課題である。

Abstract

A Consideration of the Learning Content for Nursing Students in Continuing Nursing Care Practicum

Purpose: To clarify the learning content by analyzing reports submitted by students in continuing nursing care practicum.

Method: Using the records submitted by 54 students who agreed on the research purpose in consideration of ethical issues, a qualitative and inductive analysis was made on descriptive data to organize learning settings and content.

Results: Students have learned through medical treatment and continuous treatment of patients, conferences, and by viewing records. Students have also learned that patients desire specialized medical care, have been adjusting themselves to their environment, and feel burdened or uneasy about receiving

1) 岐阜聖徳学園大学看護学部

Faculty of Nursing, Gifu Shotoku Gakuen University

2) 元岐阜聖徳学園大学看護学部

Formerly Faculty of Nursing, Gifu Shotoku Gakuen University

medical services. In addition, through specific nursing practices, students have learned the significance and methods of collaboration required for continuing nursing care, and the role, uniqueness, abilities required, and specific ethical behaviors of outpatient nurses in interprofessional collaboration setting.

Consideration: Students understand the patient characteristics in various settings and have learned the role and uniqueness of an outpatient nurse from the perspective of interprofessional collaboration. Thus, the objectives of practicum have been mostly achieved, and the effectiveness in continuing nursing care practicum in the integrated field has been confirmed. Exploring more practicum methods will be the next issue to be addressed.

キーワード：外来看護師、継続看護実習、看護学生、実習レポート、統合分野

Keywords: outpatient nurse, continuing nursing care practicum, nursing student, practicum report, integrated field

I. 研究の背景

我が国では急速に進む超少子高齢社会に対応するために、保健医療福祉行政はめまぐるしく変化してきている。医療現場では、医療費の高騰、専門職の人材不足、在院日数の短縮化に拍車がかかり、いかに効率的に治療し、早期に地域(自宅や施設)に移行するかということが課題となっている。同時に多様な保健医療福祉専門職がいかに連携し、より質の高いケアを提供できるかということも喫緊の課題となっている。看護基礎教育で修得すべき点は「生活の質の向上」に向けた教育が重要とされており(一般社団法人日本看護系大学協議会, 2018)、卒業後、即戦力として在宅看護ができる看護師の育成が期待されている。

看護基礎教育において、看護学生は入院している病棟の患者への看護はもとより、在宅に移行する患者の療養支援を視野に入れた看護について学習する必要がある。横内ら(2019)は、在宅療養につなげていくための外来看護師の役割の重要性を強調しており、宇都宮ら(2018)も退院支援が成功するためには、病棟と外来看護の連携が重要であると述べている。このように在宅への移行支援にあたり、外来診療の場を経験し、継続看護のあり方を学習しておくことは、スムーズな退院支援や在宅への移行支援が可能となると考える。そもそも外来は病院の顔であ

り、地域住民が医療にアプローチする最初の入口であり、出口といった重要な場である。そういう重要な場である外来で、看護基礎教育において実習を組み入れることは、多様な患者への対応を迫られる看護職育成の基礎となると考える。住田(2019)は看護大学における外来看護教育の重要性と期待される点を強調している。一般に外来の機能は健康診断(小児では発達の診断含む)、健康障害時の検査・診断・治療、慢性疾患等の継続した経過観察・治療、各種相談活動である。ほとんどの医療機関では、保健医療福祉等との外部施設や院内各部署との連携のために地域連携室が設置され、この場は入院と退院をつなぐ重要な場となっている。外来は一般外来診療だけでなく、がんや糖尿病などの専門外来、緊急時の対応を行う救急医療の場でもある。入院期間が非常に短縮化された昨今では、外来看護の果たす役割の重要性は、ますます高まってきている。看護が継続し、円滑に在宅に移行するためには、病院内での病棟と外来の連携、外来と地域の連携が重要である。また、看護を継続し、退院後の医療の質を担保するためには、看護師間のみでなく、看護師以外の多職種との連携が重要である。

このような背景を踏まえ、本看護学部では、学部の特徴に教育カリキュラムの柱としてコミュニケーション能力と多職種連携する能力の

継続看護実習における看護学生の学習内容の検討

育成を目指して、「多職種連携」「退院支援論」等いくつかの関連科目を配置している。多職種連携の現場を実践的に学習するために外来で実習する「継続看護実習」を設定している。ここでは診療科に関わらず、総合病院における外来部門の看護の役割や院内・院外との連携の状況、多職種連携の状況を学習し、改めて、看護師の役割を深く学ぶ機会とした。

これまでの外来看護実習は、成人看護（柴田ら，2015；荒ら，2016）、小児看護（糸井ら，2013；白坂ら，2014）、在宅看護（中田，2005）、母性看護（小川ら，2002）、精神看護（石川ら，2017）等の位置づけで、そのほとんどが専門分野の学習内容を達成目標としていた。一方、本学の外来における「継続看護実習」は、カリキュラムの統合分野に位置づけ、実習の総まとめとして継続看護を学習するために外来看護師の役割の他、多職種連携を視野に入れた看護師の独

自の役割や倫理的行動の理解を目標に設定している。

そこで、本研究では、本学部が設定した「継続看護実習」の学生の学習内容を検討し、目標達成状況の確認を行うと共に、今後の課題を検討することとする。本研究によって、今後に向けたより効果的な実習にするための課題を見出すことができ、ひいては看護学部の教育の質向上に寄与すると考える。

II. 目的

「継続看護実習」で提出されたレポートを分析し、学生の学習内容を明らかにし、学習内容から目標達成状況を確認する。

III. 継続看護実習の概要

統合分野の必修科目1単位1週間(45時間)で4年生前期に配置している。学生は4つの総合

表1 継続看護実習の概要

	午 前	午 後	備 考
月	ガイダンス 事前学習確認 グループディスカッション (学内)	実習計画立案 (学内)	これまでの授業内容の振り返り、文献検討やカンファレンスを通し、各自の実習目的、目標、実習の心構え等をより明確にする。
火	実習施設オリエンテーション 臨地実習	臨地実習 カンファレンス	①総合案内、初診受付、再診察受付、外来部門（放射線部、透析室、外来化学療法室等を含む、地域連携室、訪問看護部、看護相談室などの見学実習を行う。 ②継続して健康管理が必要な人々の保健・医療・福祉のニーズを把握するための視点を明らかにする。
水	臨地実習	臨地実習 カンファレンス	
木	臨地実習	臨地実習 カンファレンス	
金	グループディスカッション および実習報告会 (学内)	実習のまとめ 記録の提出	事前学習や実習を手がかりに、チーム医療を行う上での看護の役割と地域医療連携のあり方について学ぶ。
<p>実習場所（実習施設によって変更する） 内科、総合内科、外科、整形外科、眼科、皮膚科、呼吸器内科・腫瘍科、神経内科、乳腺内科、リハビリテーション科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、胸部・心臓血管外科、脳神経外科、放射線科など。 看護外来（ストーマ外来、フットケア外来等）。但し、患者の同意や医師の許可が得られないなどの診療科は除外する。 学生配置：1部署につき、2～3名で複数箇所見学。</p>			

病院の外来診療の場で実習し、主に見学実習であるが、場合によっては患者との関わりも可能としている。実習概要を表1に示した。

実習目標は以下の4つである。

- 1) 病院外来の診療科における患者の特徴と看護の役割を理解できる。
- 2) 健康の保持・増進、治療、回復において、様々な役割・機能を担っている医療関係部門(者)の実践を通して、多職種連携を行う上での看護の独自の役割が理解できる。
- 3) 外来看護の実践を通して継続看護の現状および保健・医療・福祉体制を理解し、地域医療連携における看護の役割と機能を理解できる。
- 4) 外来における看護職としての倫理的行動について理解できる。

IV. 研究方法

1. 研究方法：質的帰納的研究デザイン
2. 対象：本看護学部の学生で、201×年度4年次学生で継続看護実習を終了し、単位認定された学生56名中、研究協力(最終レポートを研究データとして活用する事)に同意した学生54名。
3. データ収集期間:20××年2月6日～19日。
4. データ収集方法
 - 1) データは学生が実習記録と共に提出した最終レポート(目標1～4に関する学習内容で、A4版1-2枚である)。
 - 2) 実習成績確定後、研究代表者が学生に一斉に研究に関わる説明協力依頼文書と同意書及び撤回書を配布し、文書と口頭で説明し、学内1階レポートボックスに同意した学生の同意書の提出を求めた。同意撤回時期の終了後、同意書を回収し、同意した学生の最終レポートのみ抽出、コピーし、学生には原本を返却した。学籍番号と氏名を切り取ったレポートを分析対象とした。
5. 分析
レポートの記述内容を精読し、「実習で経

験した学びの場面」と「継続看護実習で学んだこと」について、実習目標毎に抽出し、記述内容を意味内容の文脈ごとに抽出し、類似性と相違性に沿って、コード化し、サブカテゴリー、カテゴリー化した。分析は共同研究者間で分担検討した後、さらに研究者3人で繰り返し検討しデータの妥当性、信頼性の確保に努めた。

V. 倫理的配慮

1. 所属施設の倫理委員会の承認を受けた(18N-13)。
2. 対象の学生に対して研究の趣旨、倫理的配慮について、文書と口頭で説明し、同意を得た。研究協力については、文書に任意性の保証(撤回含む)、匿名性、守秘義務、データの保護・終了後の破棄の方法、他に流用しないこと、学会等への公表、連絡先等を記載し、倫理的配慮について説明した。

VI. 結果

それぞれの記述データをコード化した後、サブカテゴリー、カテゴリーへと抽象レベルをあげ、整理した。コードを<>、サブカテゴリーを「」、カテゴリーを『』と示す。

1. 実習で経験した学びの場面

学生が学習した場面のデータは146件(n=54)であり、6つのカテゴリーと17のサブカテゴリーが抽出された(表2)。学生は診療や相談・指導場面、記録閲覧等の様々な場面で学習していた。

2. 継続看護実習で学んだこと

ここでは目標ごとに整理した結果を説明する。

1) 目標1

データは561件であり、“患者の特徴”と“看護の役割”に分けてカテゴリー化した結果、“患者の特徴”は5つのカテゴリーと17のサブカテゴリーが抽出され、“看護の役割”は4つのカテゴリーと22のサブカテゴリーが抽出

表2 継続看護実習における学生の学びの場面 データ数 146件 n=54

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
外来診療の場面	一般外来	外来
		紹介外来
	専門外来	専門外来(HIV外来、ストーマ外来など)
	救急外来	救急外来
治療場面	外来での定期的治療場面	化学療法 放射線科
	専門治療センターでの治療場面	腎センター(透析センター)
		肝疾患診察医療センター
入退院・地域連携部門での場面	入退院センター窓口	入退院支援センター 患者相談窓口・入院センター
	地域連携室での支援	地域連携室での支援の場面
カンファレンスの場面	多職種カンファレンス	多職種カンファレンス
	退院前カンファレンス	退院前カンファレンス
		退院前共同指導
看護師が患者に実際に関わっている場面	プライバシーへの配慮場面	プライバシー保護のためカーテンを使用している場面
		患者のプライバシーを守るために通し番号で患者を呼んでいる場面
		男性医師が羞恥心のある部位を診察する際、女性看護師が診察補助を行っている場面
		カルテが患者や他者から見えないように配慮する場面
	患者へのオリエンテーション場面	説明を行っている場面
		患者へのオリエンテーションや処置についての説明場面
		入院前オリエンテーション
	患者・家族との相談場面	患者の気持ちを傾聴している場面
		家族からの相談場面
		患者からの治療に関する相談の場面
	待合室での声掛け	診察室待ちでの看護師の声かけの場面
	看取りの場面	看取りの場面
	認定看護師の関わり場面	皮膚・排泄ケア認定看護師の関わり場面
糖尿病認定看護師が指導している場面		
記録類の閲覧	診療に関する書類	カルテ、サマリー、診断書を閲覧した

された(表3)。まず“患者の特徴”は、①『疾患や背景等が異なり個別性がある』、②『専門的な医療を望んでいる』、③『置かれている様々な環境を調整しながら生活している』、④『受診のために様々な負担を強いられている』、⑤『様々な不安を抱えている』であった。①は「疾患、緊急度、理解度が異なる」、＜家庭背景がさまざま＞＜社会的背景がさまざま＞などから「個別性がある」等の3つのサブカテゴリーから成り、②は＜専門的な検査や高度な治療を期待している＞、＜より専門的な生活指導を望んでいる＞等であった。③は「地域の生活者である」や＜継続的に受診をしている＞などの「疾患とつきあいながら生活をしている」、「自分の置かれた環境と折り合いをつけながら生活している」と＜生活習慣を自己管理している＞などの「病気を悪化さ

せないために自己管理している」、＜家族の都合に合わせて受診している＞等から「家族の協力を得て生活している」の5つのサブカテゴリーから成り、④は「患者は限られた時間や回数で受診をしている」、「患者は時間の拘束や経済的な負担がかかる」等の3つから成り、⑤では、患者は「継続治療に対して不安を抱えている」、「身体的な不安を抱えている」、「予測できないことに不安を抱えている」等5つのサブカテゴリーから成り立っていた。

“看護師の役割”は、①『患者・家族の意思を尊重し、セルフケア向上に向けて支援する』、②『診察前より患者が安心して受診できるように医師との調整等環境整備を行う』、③『短時間に、効率的に院内・外の多職種と連携し、患者のニーズに応じた看護を行う』、④『患者を尊重しながら専門的知識・技術

表3 目標1 患者の特徴と看護の役割 n=54 561件

	カテゴリ	サブカテゴリー
患者の特徴	①疾患や背景等が異なり個性がある	疾患、緊急度、理解度などが異なっている
		個性がある
		抱えている問題が見えにくい
	②専門的な医療を望んでいる	専門的な医療を望んでいる
		地域の生活者である
	③置かれている様々な環境を調整しながら生活している	疾患とつきあひながら生活している
		自分の置かれた環境と折り合いをつけながら生活している
		病気を悪化させないために自己管理している
		家族の協力を得て生活している
	④受診のために様々な負担を強いられている	限られた時間や回数で受診をしている
		受診まで長い時間を待っている
		時間の拘束や経済的な負担がかかる
	⑤様々な不安を抱えている	継続治療に対して不安を抱えている
		身体的な不安を抱えている
		即時の対応が受けられないことに不安を抱えている
予測できないことに不安を抱えている		
看護師の役割	①患者・家族の意思を尊重し、セルフケア向上に向けて支援をする	患者のセルフケアが向上するよう支援する
		患者の自己効力感が向上するよう支援する
		患者が意思決定できるように支援する
		患者の思いを傾聴し、精神的に支援する
		家族の思いを傾聴し、支援する
	②診察前より患者が安心して受診できるように医師との調整等環境整備を行う	個別性に合わせて支援する
	③短時間に、効率的に院内・外の多職種と連携し、患者のニーズに応じた看護を行う	診察前に患者の病状を把握する
		患者・家族のニーズを把握する
		患者の状態をアセスメントする
		患者と医師との橋渡しをする
		患者が話しかけやすい環境づくりを行う
	④患者を尊重しながら専門的知識・技術を提供し支援する	診療の補助をする
		患者が受診しやすいような調整を行う
		患者に予定を伝え見通しをもてるよう配慮する
		患者に継続して関わることで一貫性を保った支援をする
		限られた短時間で患者のニーズを把握し看護介入をする
		病院内の他部門と連絡調整する
		多職種との情報共有を行う
		病院以外の多職種と連携する
		専門的知識をもって支援する
専門的技術(観察・コミュニケーション)をもって支援する		
	患者に寄り添い、患者の生活を尊重する姿勢で支援する	

を提供し支援する』であった。①は「セルフケアが向上するよう支援する」、「意思決定できるように支援する」、〈疎外感や孤立感を軽減できるように支援する〉、〈生き甲斐が持てるよう支援する〉等から「患者の思いを傾聴し、精神的に支援する」、「家族の思いを傾聴し、支援する」等の6つのサブカテゴリーから成り立ち、②は〈診察前に問診を行う〉、〈トリアージを行う〉等から「診察前に患者の病状を把握する」、「患者・家族のニーズを把握する」、「患者の状態をアセスメントす

る」、「患者と医師との橋渡しをする」、「患者が話しかけやすい環境づくりを行う」、「患者が受診しやすいように調整する」等の7つであった。③は「患者に予定を伝え見通しがもてるよう配慮する」、「患者に継続して関わることで一貫性を保った支援をする」、「限られた時間で患者のニーズを把握し看護介入をする」、「病院内の他部門と連絡調整する」、「多職種との情報共有を行う」、「病院以外の多職種と連携する」の6つで、④は「専門的知識をもって支援する」、〈調整・交渉能力〉、〈五

継続看護実習における看護学生の学習内容の検討

表4 目標2 目標3の学習内容 (n=54)

目標	カテゴリ	サブカテゴリ
目標2 261件 多職種が連携を行う上での看護の独自の役割	①収集した情報を多職種に提供し、継続的支援につなげる	外来他部署の看護師と情報を共有し、支援している
		患者と家族のニーズに応じて多職種が協働して支援する
		看護師から多職種へ情報発信・提供する
		切れ目のない継続的な支援を行う
		看護師は連携するために情報収集をする
	②患者の意見を代弁し、多職種との連携を調整する	地域との連携を支援する役割をする
		多職種との橋渡しの役割をする
		コーディネーターとしての役割をする
		患者の代弁者としての役割をする
		支援体制を整備・維持する役割をする
	③多職種と連携し、患者のセルフケア能力を最大限引き出し支援する	患者の生活者としての背景を理解し、支援する
		退院後の生活を見越して支援する
		他部門の看護師との連携をする
		リスクを洗い出し検討をする
		患者の持つセルフケア能力に着目して支援する
④高度な調整能力を発揮して連携する	多角的な視点から最適な支援を行う	
	専門性を発揮して支援する	
	調整能力が高い	
⑤多様な手段を活用して連携する	コミュニケーション能力が高い	
	信頼関係を形成できる	
	患者の意思の尊重ができる	
目標3 170件 地域連携における看護の役割と課題	①スクリーニングして一貫したケアプランを立案する	紙媒体
		通信媒体
	②会議や記録等を活用し、連携を図る	対面
		入院前の情報を収集し、スクリーニングする
	③地域連携室や他部門、他機関と連携調整し、ケアプランに沿った入院から通院までの看護を行う	一貫性のある最適なケアプランを立案する。
		カンファレンスを開催し、情報共有を行う
		情報共有のために診療記録を活用する
		患者の経済面での負担を軽減する
		患者自身がライフスタイルに応じたセルフケアを行えるように支援する
		患者の不安を軽減し、安心して治療を受けられるように調整する
		入院から退院後の通院までサポートを行う
		患者が継続した療養支援が受けられるように院内外の部門と調整を図る
		患者・家族や他の医療者とのコーディネーションを行う
		他の医療職者との知識・情報の共有を行う
	地域連携室や他施設との連携や外来受診の円滑化を図る	
④多職種連携の課題	入院から退院まで継続した看護を提供する	
	患者・家族の不安を軽減する	
	患者・家族の希望を取り入れたケアプランを作成する。	
	各職種の業務内容と役割を理解する	
	多職種の独自性を理解して連携を図る	
地域・保健・福祉がきれめなく保障される体制を作る		
患者主体のサポート体制を作る		
限界があることを理解する		

感を使って観察する>等からなる「専門的技術(観察・コミュニケーション)をもって支援する」、<一緒に考え、生活を支援する>等の「患者に寄り添い、患者の生活を尊重する姿勢で支援する」の3つのサブカテゴリから成り立っていた。

2) 目標2

データは261件であり、ここでは5つのカテゴリと23のサブカテゴリが抽出され

(表4)、カテゴリは①『収集した情報を多職種に提供し、継続的支援につなげる』、②『患者の意見を代弁し、多職種との連携を調整する』、③『多職種と連携し、患者のセルフケア能力を最大限に引き出し支援する』、④『高度な調整能力を発揮して連携する』、⑤『多様な手段を活用して連携する』であった。①は、「外来他部署の看護師と情報を共有し、支援している」、「患者と家族のニーズに応じて多職種が協働して支援する」、「看護師から多職種へ

情報発信・提供する」、「切れ目のない継続的な支援を行う」等の5つのサブカテゴリーから成り立っていた。②は「ケアマネージャーに情報提供をする」等の「地域との連携を支援する役割をする」、＜患者の状態から連携すべき職種を考えてつなげる＞等の「多職種との橋渡しの役割をする」、＜カンファレンスをコーディネートしている＞等の「コーディネーターとしての役割」、「患者の代弁者としての役割」、「支援体制を整備・維持する役割」の5つのサブカテゴリーから成り立っていた。③は「退院後の生活を見越して支援する」、「他部門の看護師との連携をする」、「患者の持つセルフケア能力に着目して支援する」、「専門性を発揮して支援する」等の7つのサブカテゴリーから成り立っていた。④は、「調整能力が高い」、「コミュニケーション能力が高い」等の4つのサブカテゴリーから成り立っていた。⑤は、「紙媒体」、「通信媒体」、「対面」であった。

3) 目標 3

データは170件であり、ここでは4つのカテゴリーと21のサブカテゴリーが抽出された(表4)。カテゴリーは、①『スクリーニングして一貫したケアプランを立案する』、②『会議や記録等を活用し、連携を図る』、③『地域連室や他部門、他機関と連携調整し、ケアプランに沿った入院から通院までの看護を行う』、④『多職種連携の課題』であった。①は「入院前の情報を収集し、スクリーニングする」、「一貫性のある最適なケアプランを立案する」の2つのサブカテゴリーから成り、②は「カンファレンスを開催し、情報共有を行う」、「情報共有のために診療記録を活用する」の2つから成り立っていた。③は＜社会資源を活用し、経済的負担を軽減する＞、＜MSWを中心とした社会資源活用＞等の「患者の経済面の負担を軽減する」や、＜患者の生活の視点から指導する＞、＜患者の就学・仕事・価値観を捉える＞、＜患者のライフスタイル、生活リズムを捉える＞、＜患者・家族の管理能力を確認する＞、＜セルフケアの必要性の理解促進を図る＞、＜活力が維持できるように自己のあり方に気づくように支援する＞、＜良い点を認め、改善が必要な点を具体的に指導する＞等の「患者自身がライフスタイルに応じたセルフケアを行えるように調整する」や「入院から退院後の通院までのサポートを行う」、「患者・家族や他の医療者とのコーディネーションを行う」、「地域連携室と他施設との連携や外来受診の円滑化を図る」、「入院から退院までの継続した看護を提供する」等11のサブカテゴリーから成り立っており、④は、「各職種の業務内容と役割を理解する」、「多職種の独自性を理解し、連携を図る」、「地域・保健・福祉が切れ目なく保障される体制を作る」等の5つのサブカテゴリーから構成されていた。

値観を捉える＞、＜患者のライフスタイル、生活リズムを捉える＞、＜患者・家族の管理能力を確認する＞、＜セルフケアの必要性の理解促進を図る＞、＜活力が維持できるように自己のあり方に気づくように支援する＞、＜良い点を認め、改善が必要な点を具体的に指導する＞等の「患者自身がライフスタイルに応じたセルフケアを行えるように調整する」や「入院から退院後の通院までのサポートを行う」、「患者・家族や他の医療者とのコーディネーションを行う」、「地域連携室と他施設との連携や外来受診の円滑化を図る」、「入院から退院までの継続した看護を提供する」等11のサブカテゴリーから成り立っており、④は、「各職種の業務内容と役割を理解する」、「多職種の独自性を理解し、連携を図る」、「地域・保健・福祉が切れ目なく保障される体制を作る」等の5つのサブカテゴリーから構成されていた。

表5 目標 4 看護師の倫理的行動の理解

n=54、127件

カテゴリ	サブカテゴリー
①医療者に共通した倫理的行動	患者・家族の意思を尊重して支援する
	患者が最善の選択ができるように自己決定を支援する
	患者の個人情報やプライバシーを守る
	守秘義務を遵守し、責任ある行動をとる
	患者の安全・安楽を守る
②IC時の看護師の倫理的行動	患者・家族の人権を尊重する
	IC前の患者の状態を把握する
	IC時に同席し、必要な支援をする
	IC後の患者の理解が促進するよう支援する
③外来看護師独自の倫理的行動	十分な時間を確保し、説明する
	プライバシーに配慮するために、環境を整備する
	患者情報の漏えいを防止する
	短時間で効率的に対応する
	限られた時間の中で関係の形成をする
④看護師に求められる基本的倫理行動	外来通院開始時から関係形成を行う
	相手を尊重して関係を形成する
	患者に不利益を生じさせないように行動する
	倫理的感受性をもって意識的に行動する
	倫理的視点から常に自己の行動を振り返る
	法的な責任の範囲で看護を提供する

4) 目標4

データは127件であり、ここでは4つのカテゴリーと20のサブカテゴリーが抽出され(表5)、カテゴリーは①『医療者に共通する倫理的行動』、②『IC(インフォームド・コンセント)時の看護師の倫理的行動』、③『外来看護師独自の倫理的行動』、④『看護師に求められる基本的倫理的行動』であった。①は<患者の意思決定に沿っているか確認をする>、<救急時における治療について患者・家族と話し合い決定しておく>、<MSW、病棟看護師、医師は家族の意向に合わせた支援を行う>等から「患者・家族の意思を尊重して支援する」や<自己決定を支えるために十分な情報を提供する>、<自己決定した治療内容を受け入れられるよう支援する>等から「患者が最善の選択ができるように自己決定を支援する」、「患者の安全・安楽を守る」等の5つのサブカテゴリーから成り立ち、②は「IC前の患者の状態を把握する」、「IC時に同席し、必要な支援をする」、「IC後の患者の理解が促進するように支援する」等4つのサブカテゴリーから成り立っており、また③は<不必要な露出を避け、カーテンやタオルを使用する>、<プライバシーへの配慮のため個室空間を使用する>から「プライバシーに配慮するために、環境を整備する」、<患者を番号で呼ぶ>等の「患者情報の漏えいを防止する」、「短時間で効率的に対応する」等の5つのサブカテゴリーから成り立っていた。④は「相手を尊重して関係を形成する」や<患者家族にとって負担が最小限になる計画を立案する>、<看護の実践時には適切な知識、技術で行う>等の「患者の不利益を生じさせないように行動する」、<日ごろから意識して行動する>、<倫理的感受性を持った倫理行動をする>等の「倫理的感受性をもって意識的に行動する」や「倫理的視点から常に自己の行動を振り返る」等の5つのサブカテゴリーから成り立っていた。

VII. 考察

1. 継続看護を学習するための多様な外来場面への学生配置の必要性

外来看護師は、外来部門、すなわち一般診療外来部門や検査や治療・処置部門、専門的な指導や相談等の部門に配置されている。今回は見学実習に同意の得られた多様な部署に配置できた。これまでの研究報告等では、一般診療場面や化学療法等の継続治療場面、地域連携室での学習の場面(西留ら, 2013; 柴田ら, 2015)であったが、今回はさらに多くの場面で学習していた。特に多職種連携が直接的に学習できるカンファレンスの具体的場面に立ち会っていた。荒ら(2016)と同様に入退院センターや専門外来(HIV外来、ストーマ外来)や皮膚排泄ケア・糖尿病指導などの看護場面も見学できていたが、その他、患者・家族の相談場面や患者のプライバシーを配慮する場面などでも学習できていた。また、カルテ・診断書やサマリーなど診療記録を閲覧することによって、継続看護のために必要な連携ツールを具体的に学習していた。今回、一部の専門分野の外来でなく、多様な場面に学生を配置したことで、外来部門の看護師間・多職種間の連携、地域連携室の地域との連携、診療・治療部門におけるカンファレンス等から一貫した看護の継続性を示す継続看護の現状を学習できたと考える。

2. 継続看護実習で学習した多職種連携における外来看護師の役割と独自性

入院期間の短縮化や外来での治療継続者数が増加している中、外来看護師は短時間で多種多様な患者に適切な看護を提供する必要がある、そのためには受診患者の特徴を理解することが前提となる。学生は外来を訪れる対象(患者や家族)を、疾患・年齢やそれぞれの背景によって個別性があり、専門的医療を望んでいることや不安を抱えながら、受診のために家族との関係や仕事など様々な生活の調整をつけなければならず、受診そのものに多くの時間を費やし、

負担を強いられている等と捉えていたことから、外来受診する患者(家族)の特徴を理解することができていたと考える。

また、看護師の多様な実践場面から具体的な看護活動を学習していた。まず、目標1では『患者・家族の意思を尊重し、セルフケア向上に向けて支援する』として、看護師はセルフケアの向上をめざし、患者の不安を軽減しながら、患者自らの意思が決定できるように支援し、患者が生き甲斐を持って、その人らしく地域で生活できるように支援していると学習していた。また、『診察前より患者が安心して受診できるように医師との調整等環境整備を行う』として、診察前の病状把握をして医師への橋渡しを行い、患者が安心・安楽・安全に受診ができる環境の整備を行いつつ、診療の補助をすること、さらには患者の生活状況に合わせて外来受診の調整を行うことであり、しかもこれら全ての看護活動は、『短時間に、効率的に院内・外の多職種と連携し、患者のニーズに応じた看護を行う』とあるように、患者が受診しているその短時間かつ効率的な看護実践を行う必要があり、それが外来看護師独自の役割と認識していた。そして、看護師は『患者を尊重しながら専門的知識・技術を提供し、支援』していることも学んでいた。

外来看護師は病院内・病院外との連携の要となっており、外来看護師の役割がそのまま外来看護師の独自性あるいは外来看護の独自性と考え、ここでは、「連携における外来看護師の独自性」として述べる。前述したように外来看護師は、短時間で患者・家族の状況を把握し、個々のニーズに合わせた看護介入をすることが基本的な役割であり、独自性でもある。しかし、その役割を十分に果たすためには、外来看護師が継続看護に必要とされる多職種連携の要として、看護師の役割を十分認識した看護活動が求められる。学生は地域連携における看護師の役割として、『スクリーニングして一貫したケアプランを立案する』や『地域連携室や他部門、他

機関と連携調整し、ケアプランに沿って入院から通院までの看護を行う』(目標3)等を学んでいた。西ら(2013)は在宅看護論実習で継続看護と捉えた場面を「人々のつながり・情報の関係性を統合する」、「看護は患者・家族と医師との思いをつなげる看護師の役割」としている。人々をつなぎ、情報共有や関係性を形成する役割という点で、今回の学習内容は一致していたが、ここではさらに看護師が地域との連携を支援し、多職種との橋渡しやコーディネーター役、患者の代弁者として、病院内・外の多職種と連携協働すること等の実践活動を学習し、多職種連携を病院内のチーム医療連携のみでなく、保健・医療・福祉の他機関等と連携協働していることを地域に視野を拡大して学習をしていた。これは荒ら(2016)を一部支持した。また、『収集した情報を多職種に提供し、継続的支援につなげる』や『患者の意見を代弁し、多職種との連携を調整する』、『多職種と連携し、患者のセルフケア能力を最大限に引出し支援する』等の学習内容(目標2)から、退院後の生活を見据え、根拠のある退院支援計画立案の必要性を学習したと考える。このような学習内容はこれまでに報告はなく、新たな知見である。必修科目の「多職種連携論」や「退院支援論」の授業は、少なくとも多職種連携や退院支援・退院調整を理解する科目であり、継続看護を学習するための前提となっていたと考え、今後授業との関連をより強化していく必要がある。また、継続看護を実践するために「情報共有」は非常に重要であり、『多様な手段を活用して連携する』(目標2)や『会議や記録等を活用し連携を図る』(目標3)の学びから、学生は連携の方法や具体的な方法の実際を見学し、連携ツールの工夫や開発の必要性、さらには看護師自らが連携支援体制を整備し、維持する役割を担っていることも認識できていた。その上で『多職種連携の課題』として、学生は連携の限界を認識しつつも、相互の役割や業務を理解し、患者主体の切れ目ないサポート体制を作ることの重要性を挙げており、継続

看護における連携の意義を十分理解できていたと考える。また、外来看護師に求められる能力として、短時間で専門的知識や技術のみでなく、高いコミュニケーション能力や観察力・洞察力のみでなく、倫理的感性を常に磨き、倫理的行動がとれる能力の重要性理解できていた。特にIC時の看護師の倫理的行動は、全ての看護師に通じる内容であり、診断直後にICを受ける患者への看護を学べる貴重な機会であり、これは外来ならではの学習と考える。

以上の継続看護実習の学習内容から、学生は受診する患者の特徴を地域の生活者の視点から把握し、連携の要としての外来看護師の役割や独自性を理解しており、概ね実習目標は達成できたと考える。

3. 継続看護を学習する場としての外来看護実習の位置づけ

看護基礎教育における臨地実習のほとんどが、病院や施設に入院(入所)している患者であるため、退院後の患者の生活をイメージした看護はなかなか難しく、より看護の質の向上を目指して、看護基礎教育も積極的に患者を「生活者としてとらえる」ことを強調した看護教育にシフトしてきた(一般社団法人日本看護系大学協議会(2018))。個々の患者の入院前や退院後の生活や状況に応じた看護を実践するためには、臨地実習に外来看護実習を必修として位置付ける必要がある。外来看護の重要性が指摘されて久しいが、実習先の確保のための外来看護実習が設定されることもあり(小川ら, 2002)、これまでは必ずしも継続看護を意識した実習配置とは言えず、外来看護実習が実施されていない教育機関すら存在する。前述したように、これまでの外来看護実習は、各専門分野の実習の一部として計画実施され、日程も半日から1週間と多様であり、ほとんどの実習目標はそれぞれの専門性に特化した学習内容と達成度であり、一部に継続看護の学習が報告されているのみであった。中には継続看護を意識して目標に挙げ

て取り組んだ報告もある(中田, 2005; 糸井ら, 2013; 荒ら, 2016)。本学では統合分野に「継続看護実習」を位置づけ、全専門領域の実習終了後に実習したことで、学生は総まとめとして患者の入院から退院後の生活全体を見据えた継続看護の重要性をより深く学んでいたと考える。さらに学生は継続看護実習で、日本看護系大学協議会(2018)が提唱する各群のコアコンピテンシー、すなわち「対象の理解」、「ヒューマンケアの基本的実践能力」、「根拠に基づいた計画的な実践能力」、「特定の健康問題に対応する実践能力」、「多様なケア環境とチーム体制に関する実践能力」、「専門職として研鑽し続ける能力」等に匹敵した内容を全般的に網羅して学習していると考えられる。このように外来での継続看護実習はこれらを凝縮した形で学習できる可能性を秘めており、今後検討されるべき課題と考える。以上のことから継続看護実習の重要性が示唆されると同時に、継続看護を学ぶ場として外来実習の重要性が明確となり、「継続看護実習」は、今後も本看護学部が統合分野の必修科目として位置付けていく必要性が確認できた。

VIII. 結論

1. 学習内容から概ね実習目標は達成できた。
2. 多様な部門での外来実習は継続看護実習を学習する場として適切である。
3. 継続看護実習は統合分野において位置づける必要性が確認できた。

IX. 研究の限界と課題

今回は、一つの学年で人数も少なく、学生のレポート内容だけの結果であり、指導体制について検討していないため、一般化には限界がある。今後は指導体制を含め、継続的に学習内容を検討し、継続看護実習を充実したものにしていきたい。

謝辞

本研究にご協力いただきました、学生の皆様に感謝致します。

関連する利益相反事項はない。

文献

荒ひとみ, 苫米地真弓, 安部修子(2017): 外来機能実習における学びの内容-実習レポートからの分析, 旭川医科大学研究フォーラム, 第17巻, 27-36.

一般社団法人日本看護系大学協議会(2018): 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標, 一般社団法人日本看護系大学協議会事務局, 株式会社 白峰社, 東京.

石川千恵, 長谷川博亮(2017): 精神看護学外来実習における学生の学びの構造, 日本精神科看護学術集会誌, 60(2), 64-68.

糸井志津乃, 上松恵子(2013): 小児看護学実習での発達外来実習の学び, 目白大学健康科学研究, 第6号, 37-42.

中田芳子(2006): 外来看護実習での学生の学び, 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集(15), 22-32.

西留美子, 伊丹英智子, 野崎百合子他(2013): 継続看護を学ぶ外来実習場面の研究-継続看護実践モデルを用いて-, 協立女子短期大学看護学科紀要, 第8号, 39-52.

学生が得た妊婦理解の違い, 日本看護教育学会誌, 11(3), 33-40.

小川久喜子, 山口栄一, 久米美代子他(2002): 疑似妊婦体験学習と産科外来実習での学生が得た妊婦理解の違い, 日本看護教育学会誌, 11(3), 33-40.

柴田和恵, 大野和美, 臺野美奈子他(2015): 成人看護学臨地実習における外来看護体験実習での学び, 天使大学紀要, 15(2), 41-53.

白坂真紀, 桑田弘美(2014): 小児科外来実習における看護学生の学び. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 12(1), 61-64.

住田陽子(2019): 基礎教育から始めるこれからの外来看護教育, Nursing BUSINESS, 13(7), 25-29.

田山友子, 吉田久美子(2013): 在宅看護論実習における外来実習での学生の学び. 東京医科大学看護専門学校紀要, 23(1), 37-45.

宇都宮宏子・三輪恭子編(2018): 退院支援・退院調整-ジェネラリストナースが繋ぐ外来・病棟・地域-, 日本看護協会出版会, 2-7, 東京.

横内理乃, 泉宗美恵, 依田純子, 伊藤悦子(2019): 外来看護における在宅療養支援に関する文献検討, 山梨県立大学看護学部・看護学研究科研究ジャーナル, Vol.5, 45-55.